

【シンポジウム「超越と死」提題】

## 死線を越えてなお生きる思想

吉原裕一

衣食住の生活様式全般が色濃く欧米化している現代日本に生きる我々にとって、もし文化的伝統というものが意味をもつとすれば、それは我々の世界を外部から照らす視座として、であろう。普段、我々が自分を眺めたいと欲するときには、少しく距離を隔てた姿見の中へと自身を移動させる必要がある。同様に、我々自身の思想というものは、他者の思想に内在する視点を借りることでは、とらえ返すことができないのではなかろうか。すなわち、我々が過去の倫理思想と対峙するとき、それは我々自身の思想と何らかの差異を有するものとして理解されるが、その差異に立脚することでのみ、我々は自身の思想を一個の倫理思想としてとらえ返すことができるのではなかろうか。

「死」に関わる倫理思想を考察する場合には、そのことがより一層はっきりする。我々は自身の死を体験することができない。我々に許されるのは、他者の体験した死を擬似的になぞることだけである。もちろん、この他者は、我々が親しみを感じられるような近い他者でなくてはならない。（そうでなければ、我々はその死に現実感をもてないからである。）したがって、我々が日本の倫理思想史における〈死生観〉を俯瞰することは、自身にとってまさしく切実な助けとなる。

ある場所、ある時代という特殊かつ有限的な制約の下に生み出される倫理思想は、その制約があるからこそ、把握することが可能となる。ここでは、いわば「日本」的な「超越」や「死」の意味付けをめぐる、日本倫理思想史の観点から、いくつかの具体例をもとに考察を試みたい。

ところで、現代日本人が「死」ということがらに関して、真っ先に思い浮

かべる具体的イメージは葬式であろう。しかし、葬式の根本意義は、死者への供養ではなく、この世に残された人々が今後の故人抜きでの新たなつき合いを構築（または再確認）することにある。これでは、死者とのいわば永遠の別れに際し、当の死者をなおざりにしていることにはならないであろうか。

結論からいえば、それでかまわない。文化的伝統という観点では、我々が死者と永遠に別れることはないからである。あの世へと居場所を移した死者は、ホトケやカミとなってお盆や正月といった年中行事で我々の世界へと戻ってきてくれる。平生でも、仏壇の位牌（あるいは遺影）や神棚、あるいは墓前といった特殊な場を借りることで、我々が彼らに語りかけることは可能である。彼らの側はもっと自由であって、常にこの世の我々の動向を見通しているとされる。無論、身体を持たない死者との交流は、いろいろな点で制限や不便があることは確かであるが、普段会うことのない遠隔地の知人との交流に擬えれば、そうたいしてかわらないものである。

このように、あの世の死者が、依然としてこの世に親しく関わりを持ち続けていることを考えると、「死」そのものの非日常性は幾分揺らいでくる。全ての人にとって、必ず訪れるであろう己れの「死」は動かし難い現実であるが、こうした死生観は、その現実の厳しさを少しく緩和してくれるのである。「どうせなら、ぼっくり逝きたい」という希望は、裏返していえば主体的に己れの「死」と向かい合うことの放棄であるが、これも日本ならではの楽観的な発想であろう。

しかし、それでよいのであろうか。以上にあげた「死」は、その文化的側面についてだけである。我々が普段、文化の上に立って生活していることはもちろんであるが、我々の生は文化の内側のみに留まるものではない。死者を悼み、死者と交流する儀礼はあっても、我々が真に大切に思う人を失った悲しみというものは、儀礼の内に解消されはしない。その点を思うとき、やはり我々は「死」と主体的に対峙する必要があることを自覚せざるをえない。いくら我々の文化が「死」に対して寛容であるとはいえ、「死」に対する反省と準備がおざなりであるのは油断千万である。一般的に言えば、誰かの「死」は〈よくあること〉にすぎないかもしれない。が、己れに深く関わる

人の（または己れ自身の）「死」は〈よくあること〉ではすまされまい。

文化的儀礼によっては解消されない「死」のある部分——について、あらためて考えてみる。素朴にいつて「死」を目の前にすれば恐怖が生ずるのは自然なことである。（端折ると、この恐怖は、自己の過去への悔恨が、いつかは解消できると期待する未来がもはやその先に無いという絶望を突きつけられることに発していると考えられる。悔いのない人生を送ったと自覚する人は、そうでない人よりも格段に小さい恐怖しか「死」に対して抱かないであろう。）迫りくる「死」の現実に対し、この恐怖を克服しようとする場合、我々はいったいどうするのか。

「死」は、本質的に何ら意味を持たないものである。死を目的化しようとする試みは、必然的に挫折するであろう。ただ、「死」を手段として何かの意味へと辿り着く可能性は十分にある。

今年度の「日本思想研究」の講義において資料としてとりあげた映画『連合艦隊』の中に、特攻隊の少年兵が今わの際に「おかあさん」と絶叫しながら散ってゆく一幕があった。（事実、特攻隊として戦死した人々の最期がいかなる様子であったかということは、確かめようがないことである。しかし、描き出された作品を見る我々が、その中に共感を抱きうる何かを見いだす限りにおいて、それは我々にとっての真実であるといえる。したがって、この例を考察の対象に含めてよいと思うのである。）結論から述べると、ここには、「日本人の中に強く流れる一つの傾向、つまり、本来的自己を追究する時に究極的には自他の連関性に達するという考え方」（相良亨『武士の思想』）が特徴的に見られる。「死」を前にしたとき、我々はいわば自己の総体を自ら問わずにはいられないであろうが、そこで立ち顕れてくるべき我々日本人の「本来的自己」とは、本質的に孤立した存在ではない。あくまでも他者との連関性の中で、真の生き方に目覚める自己なのである。〈おかあさん〉とは、現実の母親その人を指すのではない。不可解な「死」が眼前に迫る中で、自己とこの世界とをつなぐべき究極的な意味が緊急に問われるとき、最も疑いようのない真実としての連関性を母子の間柄に見だし、その関係性ただ

一つに帰依してゆくための、己れの全存在を懸けた祈りなのである。

以上のことを敷衍して、『常山紀談』『保元物語』『三河物語』における「死」の例を紹介しておきたい。(注。ここでは紙幅の都合で配付した原文資料ならびに『保元物語』『三河物語』の例を割愛する。)

戦国時代の将、荒木安芸守<sup>あきのかみ</sup>は、普段から兵をととても愛していた。それは自分の一族へ対してよりもまさるほどであったが、彼はその理由を以下のように述べた。平生は親しくつきあっている、いくさでは一族とはいえ陣が別であるから互いの生死も不明である。それにひきかえ、兵は自分と「戦場に死生を共にするものなれば」兵の方が大切である。たった一人でも無事でなければ心配でたまらないのだ、と。この言葉を聞いた兵たちは「恩を思ふ事骨髄<sup>こつずい</sup>に徹せり」であったという。

後、味方が敗戦総崩れとなったとき、荒木は主君を逃がすために独り戦場にとどまる覚悟をする。お前たちはどうする、無理強いはいしないが、と尋ねる荒木に配下の兵たちは、水くさいことをおっしゃる、日ごろの我らの気持ちをご存じないとみえる、と答え、全く逃げ出す様子がなかった。荒木は「さぞあらん、寔<sup>まこと</sup>に主従の契<sup>ちぎり</sup>此世<sup>このよ</sup>のみにはあらざりけり」と笑い、荒木主従は奮戦の後、その場で一人残らず討死した。

ところで、武士が武士としてあるのはまず、この世で一族妻子を養うための生業としてである。ゆえに主従関係もまた、そうした経済活動を保護してくれるような頼もしい主君に期待して、結ぶ側面は確かにあるであろう。その意味で、一定の奉公に対して主君が一定の恩賞を与えてくれることは、家来にとって予想される当然にすぎない。

だが、主従が一体となって戦うことを日常としている戦国武士にとって、主従の結びつきの契機が、単なる打算であつたり忠義といった道徳観念であつたりすることは本来に悖る。それでは、信頼のもとお互いに命を預けて戦うことなど、とてもできないからである。主従が一体となって戦うとは、端的にいえば、主従と一緒に死ぬことにほかならない。そうした覚悟の根底には、自らの「生」および「死」に対する思想的自覚が不可欠である。

荒木は自分たち主従を結ぶ原理を、生死を共にする〈運命共同体〉であると規定する。これは一体性において〈血縁共同体〉さえも超える義理である。この自覚に基づき、荒木は家来に「情」をそそぐ。家来にとって、主君の「情」は、通常の奉公への見返りとしては期待できないものである。予想の範囲外たる「情」が降ってきて、しかもそれを「恩」だと家来が自覚するとき、日常性を逸脱する「情」を投げかけてくれた主君は、日常性を超えた唯一無二の「主君」となる。家来が「主君」の「情」に応えるには、打算的な日常の奉公ではなく、どこまでも「主君」と一体であらうとする心情をもってするほかはない。だからこそ、荒木主従は討死必至の修羅場においても、極めて自然に一心同体となって最期まで戦い抜くことができたのである。彼らが一体となれたのは、「主君」たる荒木安芸守が個々の家来の〈私〉性を十分に認め保障しようと努めたことで、それに感応した個々の家来が〈私〉性を「主君」の前に捨て去り、主従が〈私〉性という隔てのない人倫においてお互いに結びつこうと目指した結果である。整理すると、ここにおいて、主君と家来の双方ともが「主従の契」という連関性に普遍を見だし、主従の一体性において十全に戦い、現世の諸価値はもちろん生死さえも超えることが可能になったのである。

『常山紀談』『保元物語』『三河物語』、これらの話でみた例はどれもが主従関係という倫理を、この世の日常性からはみ出る部分を持つものとしてとらえている。もちろん、主従とは現世での現実的な人間関係である。しかし、そこからはみ出るものがあるとすれば、それはまさしくこの場でいう「超越」と呼べるのではないか。かくして見いだされた「超越」は、この世における価値観を相対化し、かつはほとんど無意味と化してしまう。「超越」に関わる人倫に生きることこそが真の自己の生であるとみなす立場からは、現実的な個としての生死さえも克服可能であった。

ただ、この人倫は形式としては把握できない特殊な関係である。『葉隠』では主従関係の内実が「恋」にたとえられているが、それは愛が多数の人を愛するといったことを可能にしているのに対し、「恋」は〈この私〉と〈こ

の相手〉という特殊な限定をぬきにしては成り立たないからである。その意味で、ここであげたような日本における「超越」の一典型は、とことん〈私〉的な人倫を突きつめたときに初めて見いだされるものである。〈私〉的な人倫を追究してゆくと、そこから恣意性や独善性といったものが排除されてゆき、究極的には「私」という個を脱した普遍的人倫の中に、本来的自己を自覚するという日本的な倫理思想的特徴——は、精神的風土としては現在にも受け継がれているものだとは私は考える。この特徴そのものは、独り武士の思想に留まるものではない。我々が対峙し踏まえているところの過去の倫理思想は言うまでもなく、我々自身の倫理思想の底流にも、この特徴は確かに流れている。

わが国の近代において〈文明〉という新たな「超越」が導入されたことで、伝統的に「固有の名を持った個人」であった日本人は「一個の近代市民」へと変容し、たとえば徴兵制が可能であったように数量化できる人々の群となった。これに従い、〈この私〉と〈この相手〉の特殊な間柄は、一般的な人間関係へと解体されてゆく。〈文明〉は全ての事物を一般化することで、普遍性を獲得しているのであるが、こうした特徴を我々は果たして真に〈普遍〉的だと信ずることができるであろうか。少なくとも、近代より前の倫理思想を踏まえる立場からは、否と言わざるをえない。過去の日本人が特殊なる人倫の中に生きてきたのは、そこにしか〈普遍〉がないことを信ずるからであった。

〈文明〉の恩恵に浴している現代のわれわれが、日常世界の中に生きていることは言うまでもない。〈文明〉は、一見してあらゆる非日常的な事物を日常世界へと繰り込んでくれる魔法である。しかし、その包括性を盲信することは、われわれ自身が危殆に瀕する結果を招くであろう。なぜなら、日常世界というものが存立するためには、当然それを支える根拠が必要なのであるが、その根拠は日常世界の中には見いだせないからである。（ある事物と、その根拠とは同次元ではありえない。）もし日常世界の根拠があるとなれば、それは非日常の世界においてでしかありえないが、非日常性（例えば非科学的・非現実的なもの）をそもそも否定する〈文明〉は、こうした構造

自体を韜晦し、われわれの詮索を拒むという性格を有する。そのために、われわれは日常世界の中で、「日常的には説明のつかない」数々の不条理に遭遇し当惑するのである。あえて乱暴な物言いをするならば、〈文明〉がわれわれに与えてくれる日常世界とは、既存の知識によって説明可能であるところの乏しい合理的材料のみで構成された狭隘な牢獄である。あるいはもう少し穏やかに、生育に関する好条件をそろえた人工的温室のような世界、と言ってもよい。ともあれ、このような日常世界がわれわれにもたらす最大の災厄は、いずれ必ずわれわれがここを出てゆかねばならないのに、その準備をさせてくれないことである。

「普遍は特殊においてのみ実現する可能性をもつ」という日本倫理思想史において顕在化されているテーゼは、それを個々人が内発的にとらえかえすことで、以上に述べてきたような〈文明〉の持つ弊害を克服するための大きな力となる。(かりにわれわれが全き欧米化を目指しているのなら話は別であるが)たとえ断片的なものであっても日本の文化的伝統という遺産を受け継いで生きているのであれば、われわれは過去の日本思想が到達した心情倫理の高みをあらためて見直すべきではなかろうか。「超越」は、〈文明〉がもたらしてくれるもの一つに限る必要はないのである。われわれにとって、「超越」がいくつもあるのだという確信は、なんら自己矛盾を引き起こさないであろう。初日の出を拝み、神社に詣で、念仏を称え、クリスマスに騒ぐという、欧米人からは非難の対象にしかない日本人の「いいかげん」な文化的生活が可能であるのは、われわれが血肉の底に受け継いでいる心情倫理(の断片)のおかげである。一見「いいかげん」でも破綻をきたさないわれわれの文化は、むしろわれわれの強みであるともいえる。そのことを踏まえた上で、心情倫理の源流をたずねて日本の倫理思想史を遡行してゆく営みは、われわれが限に享受している強みを一層増してくれることであろう。